

英語教育の活性化を通しての地域活性化とは

—長崎大学経済学部で考える—

開倫塾

塾長 林 明夫

Q：長崎には何をするために行ったのですか。

A：(林明夫。以下略)2016年2月11日～12日に長崎大学経済学部本館2階会議室(教授会室)で開催された地域における小・中・高・大学の英語教育の在り方を議論する「第3回長崎地域国際化フォーラム」に、公益社団法人経済同友会(東京)の知日派・親日派拡大委員会のメンバーとして参加したためです。この会議への参加は、昨年(2015年)の第2回に引き続き2回目でした。

長崎大学経済学部では、大学として地域の国際化に貢献するために、同フォーラムを東京の公益社団法人経済同友会の協力のもとに2014年から毎年開催、本年で3回目。このフォーラムには、長崎県教育長、長崎市教育長、長崎県教育庁参事、五島市長、大村市長、長崎経済同友会、長崎西高校校長、長崎経済研究所専務取締役、文部科学省初等中等教育局国際教育課課長補佐、総務省自治行政局国際室長、更には長崎県で活躍中のJETプログラムによって派遣された現職ALTの先生方、長崎大学経済学部部長、副学部長はじめ、大学関係者、企業人が参加しました。

Q：どのようなテーマで話し合ったのですか。

A：JETプログラムなどによって派遣されたALTの先生方や英語教師が力を合わせ、小学校・中学校・高校・大学での英語教育を4技能中心にし、地域の国際化を一気に進めるにはどうしたらよいかを、熱心に議論いたしました。

例えば、離島の多い五島市では、小中高一貫の英語教育のプログラムを少人数の小中高一貫校で展開、英語教育によるグローバル化で地域創生を図ろうとしています。

4技能を重視した小中高一貫の本格的で先進的な英語教育プログラムは、英語キャンプとともに全国のベスト・プラクティスとしてベンチマークに値するものです。

大村市の地元のローマへの少年使節団の伝統・歴史、アイデンティティーを重視した上でのグローバルな人材育成は目を見張るものです。

Q：長崎から学ぶべきことは何ですか。

A：英語教育の担い手である現職ALTの先生、小学校・中学校・高校・大学など学校の代表者、県や市の教育委員会の代表者、県知事や市長など行政トップ、産業界の代表者が文部科学省や総務省の代表とともに、教授会が開かれる大学の会議室を会場に丸々2日間かけて地域における英語教育の在り方を本音で毎年話し合うことは全国でも極めて珍しいようで、長崎の潜在可能性を感じました。

長崎県の参加者の多くが長崎大学経済学部の同窓生であることも幸いして、長崎のグローバル化を通しての地域経済の活性化を目指しての本音の議論が可能となり、地元有力大学の底力を痛感しました。

Q：英語教育の活性化を通しての地域のグローバル化、地域の活性化をどう図ったらよいと林さんは考えますか。

A：(1)「ヨーロッパの外国語学習共通参照枠」(SEFR)を参考にして、小学校・中学校・高校・大学・実業界の英語教育関係者が地域における4技能のCan Do List(キャン・ドゥー・リスト)を自らの手で策定することが第1になすべきことと考えます。
(2)その上で、4技能ごとにA1、A2、B1、B2、C1、C2とレベル別に学習できる教科書や音声・映像を含む補助教材を作成することが第2になすべきことと考えます。
(3)更に、4技能別のCan Do Listや教科書、教材を用いて英語のみで教えられる先生を採用し、研修を行い、必要な学校に配属させることが第3になすべきことと考えます。

Q：そのような本格的な英語教育が日本で行われているのですか。

A：(1)全国の都道府県教育委員会、市町村教育委員会の英語教育担当者の大半と小学校・中学校・高校・大学の英語の先生方の大半は、4技能の教育をどうしようかと「本気」で考えています。
(2)その具体的な行動として、SEFRを参考に独自のテキスト・教材づくりや英語キャンプを含む様々な英語教育プログラムを展開しつつあります。
(3)その最先端を走るのが、五島市や大村市、長崎市であります。英語教育改革の担い手である上智大学教授 吉田研作先生から長年直接指導を受け続けている栃木県足利市の公立小学校・中学校も、足利市教育委員会の強力なリーダーシップで最先端の英語教育を展開しているベスト・プラクティスです。
(4)よく目を見開いて近くの学校をお調べになれば、皆様のお近くにもベスト・プラクティスは山ほどあると確信いたします。

Q：問題は何ですか。

A：高校入試直前の中学3年生や大学入試直前の高校3年生の英語指導です。過去の入学試験の問題を解かせて解答・解説を日本語のみを用いて伝えるという従来型の英語指導からどのように脱却するかが、当面の課題です。

Q：英語を教える先生として、これからどうしたらよいとお考えですか。

A：(1)高校で英語を教える先生は当然のことですが、たとえ小学生・中学生を教える英語の先生でも、一番簡単なものでOKですから、「英英辞典」を用いてこれから教えるすべての語句を調べ直し、その意味を何も見ないで正確に言え、正確に書けるようになるまで「音読練習」と「書き取り練習」をなさることが第1です。
「英英辞典」で毎日10語ずつ基本的な英語の語句を調べ、発音記号も含めノートに書き写し、「音読練習」と「書き取り練習」を繰り返して、その語句の意味を英語で正確に言え、書けるまでにしてください。1日10語は1年で3650語、3年で1万語を約束します。
(2)英語で書かれた初心者用の「英文法」の参考書を用いて、小学校や中学校で学ぶ「初級英文法」を英語で正確に身に付け、教室で英語で説明できるまでにすることが第2です。
毎日、英語で書かれた「初級用英文法」を用いて文法の項目を1つずつ調べ、その内容をノートに書き写し、「音読練習」と「書き取り練習」を繰り返して、その文法事項を英語で正確に言え、正確に書き表せるまでにしてください。1日1項目は1年で365項目、3年で1000項目を約束します。

(3) 読売新聞の英語版である「The JAPAN NEWS」を、辞書を引かずに毎日1時間以上かけてスミからスミまで読み、英語の「読解力」を身につけることが第3です。「読んでわからないことは聞いてもわからない」ことが多いので、リスニングの練習は「語彙力」や「読解力」がある程度身につけてからでも十分と考えます。

全ページを通読した後、これぞと思うその日の新聞記事を1つだけ切り抜き、ノリでノートに貼り付け、「英英辞典」を用いて徹底的に意味調べをし、その意味をノートに書き写すこと。切り抜いた記事の全文と「英英辞典」を用いて調べた内容を「音読練習」と「書き取り練習」し、正確に身につけることもお勧めします。

Q：何だか英語好きの高校生になったみたいですね。

A：その通りです。初心に戻ってゼロから学び直すことが大切です。日本の英語教育が4技能中心に大きく変わるのですから、たとえ受験生を教える先生でも英語の授業はすべて英語で行わなければ、その職務を全うできないからです。

Q：最後に一言どうぞ。

A：今月も、先生方がお読みになれば必ず参考になる本を御紹介させていただきます。

(1) 前月号で紹介すべき本の1冊は、ポール・ド・クライフ著、秋元寿恵夫訳「微生物の狩人」(上)(下)岩波文庫、岩波書店1980年11月17日刊でしたが、欠けていました。お詫び申し上げます。この本を読み、医学や研究者を目指した方は世界中に数え切れないと言われている名著です。

(2) 長らく絶版だった江戸時代の商人の古典中の古典である、石田梅岩著「都鄙問答」岩波文庫、岩波書店刊が本年2月に復刊になりました。字が細かくて慣れないと読みにくいかもしれませんが、読めば必ずお役に立ちますので、我慢して何日にかけて最後までお読みください。日本の資本主義の原点とも言える名著です。

(3) 3冊目は、時枝誠記著「国語学原論」(上)(下)2007年3月16日、同続編2008年3月14日、いずれも岩波文庫、岩波書店刊です。言語を人間の生活全体の中で捉えた本書は、これからの国語教育を考える上で極めて示唆に富むものです。是非御一読ください。

— 2016年2月10日記 —